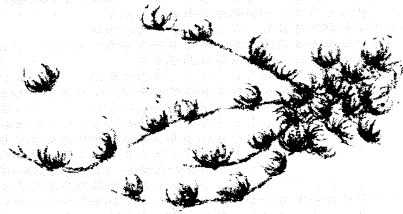


3・11を経験して 今、子どもたちのために 何ができるか

「安全神話」を脱し、
子どもを守る社会へと
変える努力を。



子どもの未来を信じよう

——問われる大人の「倫理」と「責任」

池田知隆（ジャーナリスト）

子どもは見ている

「あしでまといになるから さようなら 私はお墓にひな
んします ごめんなさい」

福島県南相馬市で六月、九十三歳の女性がそう書き残して自ら命を絶った。そのことを奈良県天理市の小学三年生、瀧本駿くんは手作り新聞で学校内に紹介した。「原発事故を調べてみると、原発は怖いと思った。おばあさんの話を知って悲しくなった」と瀧本くん。製作を手伝った母親で看護師の奈奈さんは「難しいからテーマを変えたら、と忠告したが、考えを曲げなかった」という（二〇一一年九月二十七日毎日新聞大阪本社版）。

このおばあさんは福島第一原発事故の直後、長男夫婦と別々に避難したあと、帰宅して再び同居を始め、「毎日原発のことばかりで生きた心地がしません」と悩んでいた。その死は家族など周りを気遣ったの選択だったのだろうか。瀧本くんは夏休みの自由研究の課題で原発事故について模造紙三枚にまとめ、最後に「みんなに伝えたい出来事」と

してその死を伝える新聞記事を貼り、「日本を作ってきた大人の人たちが安心してくらせるように、ぼくたちががんばらなければいけない」としめくくった。瀧本くんは「未来の安心のために科学者になってがんばる」と誓っている。そうだ。原発による不条理な死は、遠く離れた小学生の心にも深く、重く伝わっていた。

宮城県石巻市の大川小学校は二階建ての校舎を超える高さの大津波に襲われ、全校児童一〇八人のうち、六十八人が死亡、六人が行方不明になった。NHKの特集番組で、生き残った二人の子どもたちが当時の悲惨な状況を説明して「この体験を語っていきたい」と話していたが、心に強く焼きついた体験を正確に伝えたいと思うとき、子どもたちも見事な語り部となる。

九月、東京で開かれた福島の子どもたちを励ます交流集会で、東京の子が、福島の子に「こんどは福島に行くね」と伝えると、「いまは（放射能濃度が高いから）福島に来ないほうがいい」と答えていたという。放射能汚染が高くても、被災地に残る選択しかなできない子どもたち。さまざまな事情を抱えながら、厳しい現実を子どもたちはまっすぐに見ている。その鋭いまなざしに大人は目をそむけてはならない。

「見えない世界」を見る目

放射能汚染は目に見えないし、匂わない。一見、何の変

化もないように見える国土は日々侵され、私たちの体も知らないうちに影響を受けている。その「目に見えない」現実に向き合っていくうえで、最も大切なことは「子どもを守る」ということだ。

子どもは細胞分裂が活発で、放射線の感受性は高い。まずは、子どもたちが遊ぶ場所、学校の除染を最優先にする。子どもたちの食は、大人と同じ基準で考えてはならない。食べ物の汚染度を正確に測定し、子どもには汚染が極力低いものを与えていくべきだろう。

だが、現実はどうだろうか。文科省は一ミリシーベルトと定められた年間被曝量の制限値を二十ミリシーベルトに「規制緩和」した。内外からの厳しい批判を浴びて「一ミリシーベルト以下に抑えることを目指す」ことにしたが、子どもへの配慮のなさをさらけだした。放射線量の影響について科学者の意見は確かに割れている。だからといって、放射能など「見えないもの」の存在についてあまり意識させないようにして、これまで通りの社会に戻していいはずはない。

「風評被害」にあえぐ生産者を支えるために、福島産の農作物を学校給食の食材に使うことを決めた自治体もある。そこでは生産者には放射能を気にせずに生産し、消費者には放射能を気にせずに消費することが暗に奨励されている。子どもの「いのち」、健康の維持よりも、なんとしても「生産」を中心とした従来の秩序の回復、強化を図ろうとして

いるようだが、それでいいのだろうか。チェルノブイリ原発事故の影響調査をみても、農地の除染は困難を極め、農地としての活用が無理であることをはっきりと認識すべきだろう。

「子どもを守る」という社会的合意のもとで、安全なものを優先的に子どもに提供する取り組みは、流通方式に多少手を加えれば不可能ではない。大人たちの無知と無責任な行為によって、胎児、乳幼児、そして少年少女たちの将来を破壊していくことははや許されない。

「責任」の所在はどこに

私たちは子どもたちに放射能まみれの日本という負の遺産を与えてしまった。世界的な事故を起こし、日本がこれからどんな社会、国をつくっていくのか、世界全体が厳しく見つめている。

「こんなおっかない原発をどうして地震国にたくさんつくったの?」。子どもたちに素朴に問われたとき、どう答えるのか。日本政府は「脱原発依存」社会への移行を打ち出したものの、その腰はひけ、その具体的な行程は明らかにしない。いまもなお巨大利権を貪ろうとする政治家がいれば、電源開発三法による政府交付金や電力会社のバラマキに運命を託す自治体も少なくない。日本には「ほとぼりが冷めるのを待ってから」という決め方があるが、誰がどこで

ういう権限と責任のもとに決めたのか分からないまま、責任問題が賠償問題にすり替えられてしまいかねない。この無原則で、無責任で、なりゆきまかせの政治から脱却するために、私たちはいま一步を踏み出さずして、いつ踏み出すのか。

今回の破局的事態をひきおこした責任はまず、「原子力だけは絶対安全」と偽りの宣伝を流してきた政府や電力会社、それを支えた学者、マスコミにある。しかし、その多くが「想定外だった」との言葉でもって責任逃れに終始し、子どもたちや未来の世代に対する責任には一切言及しない。しかし、その一方で騙された側にも、騙されてきたことに対する責任が残る。

なぜ「安全神話」に騙されてしまったのか。ほんやりとその危険性を気付きながらも見て見ぬふりをしてきたこと、結局はこの惨事を止められなかったことの責任の一端はやはり一般の人々にもある。そのような自覚と反省を通じて、これから誤りを繰り返さない社会をつくっていくかなくてはならない。子どもを守る社会へと、日本を変える努力をすることが大人の責務である。

次世代への「倫理」とは

原発の廃棄物は、地球上の生態系や人間を数百年から数万年にわたって苦しめる。いま、廃棄物の最終処分ができ

ている国は世界の上にもない。そんな廃棄物の処理を次世代に置き去りにするのは、社会正義にもとるのではない。核をあつかう人間の技術が未完成なのに、それに信頼をおくことに「倫理」的な問題がありはしないか。

ドイツは五月末、二〇二二年までに国内十七基すべての原子炉を閉鎖することを発表した。その決断に導いたのが、メルケル首相が招集した「安全なエネルギー供給のための倫理委員会」だった。原発は人の暮らしや社会の未来に対してはたして有益なのか、それとも不利益なのか。もしも過酷な事故が起されれば、原発から遠く離れた無関係な人々の生活が奪われ、コミュニティも失われる。永続的に多くの生命が脅かされる可能性がある。

そして徹底的な論議がなされた結果、原子力エネルギーの供給を段階的にやめる決断が下された。それは「社会の負うべき責務」だという。ドイツが「脱原発」に踏み切れたのは、欧州で電力自由化が広がり、隣の原子力大国フランスから電力を輸入できるという事情もある。そうはいくものの、今後、日本がどのような国、社会を形成していくべきかというビジョンを作り上げるうえで、ドイツに学ぶことは多い。

日本においても、原発に象徴される中央集権的な政治システムから脱却し、自然エネルギーの活用をすすめる、自立分散型社会の形成を目指すべきだろう。安全・安心な社会

をつくるために、衣・食・住すべてにわたる人間の営みを見直さなくてはならない。そうやって人々の暮らしや地域の「自立」を促すことなしに日本再生の希望はない。

想像力と変わる勇気を

「子どもを救え!」。これが原発事故に際しての最大のメッセージだ。子どもたちにただ望みを託すだけではなく、大人たちもまた、希望の光をとにも探していかななくてはならない。

「私たちは誰でも変わる勇気を持っています。奪われてきた自信を取り戻しましょう。そして、つながること。原発をなお進めようとする力が、垂直にそびえる壁ならば、限りなく横にひろがり、つながり続けていくことが、私たちの力です。私たちひとりひとりの、背負っていかなくてはならない荷物が途方もなく重く、道のりがどんなに過酷であっても、目をそらさずに支えあい、軽やかにほがらかに生き延びていきましょう」

「福島県の想いをひとりでも多くの方に伝えたい」という「ハイロアクション福島」の武藤類子さんが「9・19 さようなら原発5万人集会」で発した言葉だ。このスピーチは英訳され、その思いはいま、世界の人々の心に届き、確実に広がっている。

度重なる災害に見舞われるなかで、困窮をきわめる地域

社会をどうすればいいのか。改めていうまでもなく、東北岩手が生んだ宮沢賢治は、そのことを本気で考え、数々の童話で表現した。

賢治が生まれた明治二十九（一八九六）年には、明治三陸地震（大津波）があり、約二万二千人の死者が出た。賢治二十七歳の大正十二（一九二三）年には関東大震災があり、代表作『銀河鉄道の夜』の原稿の裏には、震災を見舞う書簡の下書きが書かれていた。そして没年の昭和八（一九三三）年には、死者、行方不明三〇六四人を出した昭和三陸地震（大津波）を目にしている。

賢治の童話には、多くの死者たちの思いが息づいている。亡くなつていった人たちを心に深く受け止め、未来にどう語り続けていくのか。いわば「共死」をとおして「共生」のありようを静かに探究した作品が少なくない。その賢治が中等学校の生徒たちに語りかけた文章にこんな一節があった。（「生徒諸君に寄せる」）。

潮や風……

あらゆる自然の力を用ひ尽くして

諸君は新たな自然を形成するのに努めねばならぬ

ああ諸君はいま

この颯爽たる諸君の未来圏から吹いて来る

透明な風を感じないのか

困難な現実には立ちすくみながらも、子どもたちの未来を信じよう、との願いが込められている。未来からの風をしつかりと感じ、現実を少しでも望ましい方向に日本社会を動かしてゆくことで「明日」への道が拓かれる。重く、果てしなく長い道のりだが、私たちはその一步を刻んでいかなくてはならない。

表紙 小泉るみ子
カット 森村郁子
デザイン 追川恵子

● ● ● **ホットライン** あなた自身は変わったか? 「ミツバチの羽音と地球の回転」 鎌仲ひとみ — 1

3・11を経験して 今、子どもたちのために 何ができるか — 2

子どもの未来を信じよう — 問われる大人の「倫理」と「責任」 池田知隆
私たちは、何をしていたのか — 『あしたは晴れた空の下で』 再び 中澤晶子
被災地支援プロジェクトに参加して 綿貫明日香
「みやぎ子どもの文化を支援する会」の立ち上げとこれからの活動
酒井文子
福島県の小学校から 小熊真奈美
チェルノブイリの経験から学ぶ 小寺美和

新刊紹介 絵本 低学年向/中学年向/高学年向/ノンフィクション/ヤングアダルト/マンガ — 18
よかったよこの本 『ダレン・シャン』 福嶋稜 — 25
私たちのなかま 人と本を結ぶ、文庫・図書館、ともに 高崎由紀子 — 26
やってみない?! くねくね龍 まきまきさん — 29
作品をよむ 『ローワンと魔法の地図』 徐奈美 — 30
子どもとよむ 1冊 『ぺろぺろキャンディー』 中谷布美 — 32
としょかんコーナー 「第97回全国図書館大会 多摩大会」広げよう、図書館のある暮らし
水越規容子 — 34

● ● ● **資料コーナー** — 36

● ● ● **きりぬきジャーナル** — 37

● ● ● **ひろば** — 38

編集後記・購読のご案内・次号予告 — 40

(親地連ホームページ URL) <http://www.h7.dion.ne.jp/~oyatiren>